

(承前) 無限なるもの
にたいする責任=応答可能性
responsabilité Verantwoordlichkeit
には、己を無にする「謙遜」
が前提となる。パウロに由
来するキリスト教神学では、
これを κένωσις/ kenosis と
称する。神が人類を救うた
めに、無限の存在を虚しく
して有限の世界に降り立つ
という自己限定。それが救
世主キリストであった。同
様に神の声を受けるには、
自己放棄が要求される。導
師エックハルトを受けて、
ドイツ語ではこれを Gelasenheit と訳すが、日本では
伝統的にそれに禅語の「放
下」を充てる。禅の世界では
「ほうげ」と読むが、ハイデ
ガーに由来する Gelassenheit
では「ほうか」と呼ぶ
べし、とするのが辻村公一
の主張だった。ガタマー弟
子筋のジャンニ・パッティ
モはここから「弱き思惟」
を導く。

歓待は hospitality だが、
それは敵対 hostility と表裏
一体である。歓待の主人
host はまた容易に人質 hos-
tage となる。己を空しくし
て神を歓待するとなれば、
それは神への絶対服従を意
味する。また客とはドイツ
語では Gast だが、これは
Geist の到来でもある。Gast

連載147
「まれば」との到来と客人歓待とのあいだ
国際研究集会「比較思想から見た日本仏教」でのエンリコ・フォンガロの論考を出発点に(2)

国際日本文化研究センター研究員、
総合研究大学院大学教授
稲賀繁美

は ghost すなわち幽霊 revenant
であって、それは式神
と同様に再来する。そもそ
も聖霊 heiliger Geist もまた、
そうした霊 spirit の息吹 ruah
だった。聖霊 hagia pneuma
による憑依こそが神秘体験
と呼ばれる現象だろう。

さらに「他者」は、ひと
たび受け入れられれば、も
はや以前の「他者」ではな
く、迎えた側も、もはやそ
れ以前の己ではない。歓待
以前の「我」の自己同一性
はすでに更新されているか
らだ。歓待はしたがって自
己変容の契機であり、改悛
は自己喪失の体験と言わね
ばならない。宗派の異同に
拘らず、ここには宗教体験
の源泉がある。

Kenosis すなわち「神の
自己空無化」(阿部仲麻呂
神父) に即して、東西の思
惟の交錯を探る方が、こ
こにたまさか遠望されるこ
ととなる。不毛なる正統教
義論争の彼方にむけて。

*「比較思想から見た日本
仏教」(国際日本文化研究セ
ンター国際研究集会、2015
年2月21日、末木文美士主
催) 最終討論のため司会者
として即興で準備した発言
内容を要約した。

—この項終わり